

# エミリー・ブロンテの研究

## —涙の意味するもの—

宮川下枝

今回は作品 *Wuthering Heights* 中の“涙”をとり上げてみたいと思う。エミリーの作品の中に実に涙の場面が多いことは、読んでいるうちに気付くものである。興味をそゝられ書きとめていたが、始めはその描写のうまさを楽しんでいたのであるが、徐々に涙によって人物を活々と浮き上がらせていること、うまい性格描写が隠くされていること、又その場の情況説明が見事になされていること等に驚くに到ったのである。

『嵐ヶ丘』は偉大な作品、力と想像力に満ちた小説であり、激しい恋と復讐の物語であることは既に充分知られている処であり、これは安っぽいお涙頂戴式の物語ではないことは言わずもがなのことであって、涙の意味は全々別個のものである。ではそれは一体何を意味するのであろうか。

### 涙の意味するものとは？

この作品『嵐ヶ丘』を心のやさしい作品であると批評する人は余り見当たらないようである。だが涙に関する限りは、やさしさを表明しているように思うのである。処々に見られるネリーのやさしさ、娘キャシイの中に見受けられる心やさしさはすべて涙の中に表明されている。勿論母親キャサリンのくやし涙もあれば又立腹の涙もあるが小説の中に次のような表現があり、

— it seemed Heathcliff could weep on a great occasion like this.

(Chapt. XV)

ヒースクリフのように一見残忍な男でさえも、一大事に泣ける人間であると言い、涙の枯れていない、やさしさの片鱗を有していることを証明し

ているようで興味深い。血も涙もない人間はいないということの中に、エミリーの捉えんとする真の人間像があるように思うのである。

ポロリと頬を伝わる一滴の涙の美しさ、涙に濡れた眼の魅力などの勝れた描写を読む時に、エミリー・ブロンテ自体が涙の美しさに心惹かれた人ではないかと思うのである。子供の眼に浮ぶ涙は大人を慌わてさせ、女性の眼に光る涙は男性をうろたえさせ、又親の眼に宿る涙は子供に大きないましめとなるものである。泣くことを忘れ、滅多に泣かなくなった大人にとって、真実の涙は感激をよびおこすものである。泣くしぐさの中に人間の心の奥底の感情を汲み取り、この一粒の涙を見遁さなかったエミリーは確かにデリケートな感情をもつ観察力の鋭い作家である。

では、涙の描写を拾ってみてその涙を通して彼女の訴えたいものを考えていこう。

なおこの

Imagery に就いては、

‘As Mrs. Van Ghent points out, the plethora of windows, doors walls, and locks in the novel have a metaphoric as well as literal value.’<sup>1)</sup>

(ミセス・ヴァン・гентも指摘するように、小説の中に出る幾多の窓；ドア、壁、鍵などは、文字上の意味と共に比喩的な意味も有しているのである。)

とあるように、窓、ドア、などについて述べたものは多く見るが涙については余り見ないようである。

The Structure of *Wuthering Heights*.<sup>2)</sup> なる書物に於いても「火」「焰」「雪」「風」「水」「空気」等の imagery も多いのであるが…。

## 1. リントン少年の涙

第一群に集めたのは上流階級の少年たちの意気地のない涙についてである。もともと、牧師の娘として生れ育った彼女は上流階級に対する僻見を

1) Lockwood's Dreams and the Exegesis of *Wuthering Hights* by Edgar F. Shannon, Jr. (p. 212)

2) *The Inner Structure of Wuthering Heights*, by Van de Laar.

もっていることが作品の中にあちらこちらで見受けられる。したがってその上流階級の少年たちというのは実に弱々しく女々しさをもった姿に描かれているのである。

Cowan Bridge での勉強は、環境のひどさに姉二人が肺を病んで死亡し、慌てた父 Patrick が残る Charlotte と Emily を呼び戻した為、二人は暫く家にいたが、再び学校に行っている。姉シャーロットが先に、後からエミリーが行ったのが Roe Head という Miss Wooler の経営する学校であった。今度はよい学校で二人はよい勉強をしたのであるが、この折窓越しに遙か谷間に見える邸宅をエミリーはいつも憧れて眺めていたようである<sup>(3)</sup>。小説の中で少年ヒースクリフと少女キャサリンが駆け出して自分達の世界から脱出し、始めて新しい世界にとびこみ、Thrushcross Grange をのぞくのは、このエミリーの憧れが具体化したものだと言われている。始めてのぞいたその豪華な邸の中の部屋は、全く素晴らしく真紅のカーペット、真赤なカバーのかゝった椅子とテーブル、金色で縁取られた純白の天井、中央に銀の鎖でつないだシャンデリヤ、まるでベルサイユ宮殿を偲ばせるようなものである。

だが、その中に見た少年少女の姿はどうであったであろうか。

Isabella...I believe she is eleven, a year younger than Cathy.. lay screaming at the farther end of the room, shrieking as if witches were running red-hot needles into her. Edgar stood on the hearth weeping silently, and in the middle of the table sat a little dog. (Chapt. VI)

「イザベラ——彼女はキャシーより一つ若くて11才だと思うよ。——はね、まるで魔女が焼け火箸でも突き刺したかのように、部屋の隅っこに寝そべって泣き叫んでいるのさ。エドガーは、暖炉の前に突立って黙って、めそめ泣いてんのさ。そしてテーブルの真中には、小さな犬が居るんだよ。」

ヒースクリフがネリーに、見て来た部屋の様子を話しているところである。上流階級の息子であるのに、男子がめそめそと泣いている様子を話して、ヒースクリフは全く軽蔑しきった態度である。又反対に女の子はヒス

2) *The Brontës and their World* by Phyllis Bentley. p. 53.

テリックに泣き叫んでいる。この争いの涙は、恵まれた筈の家庭に育った子供たちが平和な状態に居ないことを示して、エミリーのもつ上流階級への反抗を現わしているとも見てよいであろう。

この上流階級に対する反抗については Arnold Kettle も述べているところである。

The rebellion of Catherine and Heathcliff is made completely concrete. They are not vague romantic dreamers. This rebellion is against the degradation . . . . .<sup>4)</sup>

キャサリンとヒースクリフの反抗は完全に具体的なものである。漠然とした夢想者ではない。この反抗は墮落に対する反抗である。

No coward soul is mine ! と謳い切った男のように強いエミリーが、この女々しい男の子を描くのだから彼女の嫌悪の情を見ることが出来る。

このめそめそした涙をもう少し拾ってみよう。

世代は第二世の時代になっている。スラッシュクロスの少女イザベラは、18才に成長している。突然姿を現わしたヒースクリフの凜々しさに魅かれ彼に唆のかされて駆け落ちをしてしまう。ヒースクリフは、恋人を奪って結婚した Edgar への復讐の為にだけ彼女を利用しただけのことであるから、目的を果したあとは女中も同然、見向きもしない様である。耐えかねたイザベラは息子リントンを伴って逃げ出しそこで少年を育て乍ら病死してしまふ。そのひ弱な少年を、おちエドガーが遙々連れて帰った晩のことである。エドガーの娘 Cathy にとっては、まだ見たことのない従兄であったので、彼女は寝もやらず興奮して待っていたのであったが、馬車から降り立った少年は疲れ切った様子であった。

“let me go to bed, then,” answered the boy, shrinking from Catherine’s salute; and he put his fingers to his eyes to remove incipient tears.”

(Chapt. XIV)

「僕を寝かせて」と少年は答えると、キャサリンが握手をと差し出す手からしりごみした。そして、そっと眼に手をやって、出かゝった涙を抑え

4) Emily Brontë: *Wuthering Heights* (1847) by Arnold Kettle. p. 112.

ている。

何と弱々しい泣き方であろう。細い描写であり、又ふさわしい描写でもある。気の弱い少年には気の弱い泣かせ方をしている。

I proceeded to remove Linton's cap and mantle, and placed him on a chair by the table; but he was no sooner seated than he began to cry afresh. My master inquired what was the matter.

'I can't sit on a chair,' sobbed the boy. (ibid)

「私はリントンの帽子とマントを脱がせ、テーブルの側の椅子に坐らせようと思いました。だが彼は腰を掛けるや否や、新に泣き始めました。御主人様が「どうしたの？」と尋ねられますと、「僕は椅子には坐れないよ」と少年は啜り泣きました。

何と女々しい少年が描かれていることだろう。ワッと新たに泣き出した少年は御主人のエドガーを面喰わせる。「何だね、どうしたの？」との間に「僕は堅い椅子には坐れない」とべそをかくあたり、ソファだけに腰をおろしていた我儘に大事に育てられた良家の坊ちゃんの弱々しさが見事に描かれている。その泣き方も男なのに sob, 「すゝり泣く」だから頂けない。

この少年はヒースクリフの子供である以上、彼が見遁す筈はない。連れて来られた翌日には、ヒースクリフの召使がやって来て、嵐ヶ丘に連れて行くという非情さである。この少年を育てるヒースクリフの目的は、キャシイの心を惹かせて、二人の結婚を計るという悪辣なやり方である為、無惨にもリントンは成長するや、唯そのおとりに利用されるだけである。父に無理強いされて、キャシイを上手に嵐ヶ丘の家の中に連れ込まねばならなかった。このキャシイも、今は成長して立派な少女になり、何かしら心惹かれるまゝにこのあたりに姿を現していたのであった。手段にかけては、巧妙抜け目のないヒースクリフのことであるから、いろいろ息子に教え込み、彼女の来そうな日には彼を野に立たせる。まるで網を張って待つ蜘蛛のような賢しこさで、これを又、ヒースクリフが何処かでそっと見張っているのだからたまたまのものではない。そして、キャシイが遊びに来るようになった折のことである。

The tears gushed from Linton's eyes as he answered.

(Chapt. XXVI)

病弱なリントンは、野に来てでも自分の体を支える力もない程の状態である。彼に逢いに来たキャシイではあるが、その様子を見て彼女は、「今日は帰えりましょうね。」と言う。折角捉えた彼女を離しては、後でヒースクリフにどやされるのが怖い。別れるのが悲しいのではない。「彼が答えた時リントンの眼から涙がワッと溢れ出ました。」

眼に見えぬおどしに怯えびる、リントンの憶病の涙は gushed と形容されている。

この病弱な少年も、何とかキャシイを上手に家の中に誘いこむと、今度は追う者と追われる者の立場は逆転して、急に横柄な態度になる。もともと我儘に育てられた少年だから、こうなると手に負えない。折しもキャシイは父の病気がはかばかしくなくて、悲しみの折であるから、悲しみの涙にくれている。父の厳命を果して、キャシイを連れ込んだリントンは任務を終え、急に威丈高になりキャシイの注いでくれたお茶に対し、

'Now Cathy, you are letting your tears fall into my cup! I won't drink that ! (Chapt. XXVI)

「キャシイ、君の涙がコップに落ちているよ。僕はそんなの飲めないよ」と威張り散らしている。your tears とある処に唯一粒ではなく、ハラハラと涙をコップの中に落とす、キャシイの泣き方が想像出来る。拭う暇もなく、思わずはふり落ちた涙であることが、この tears の複数の表わし方で分る。だが、この涙の落ちたコップのお茶は飲めぬという、我儘なリントンの同情心さえ持たぬ無慈悲さが対照的で、相手の涙を描写してリントン少年の横柄さを表明している描き方も面白い。

Cathy pushed another to him, and wiped her face. (ibid)

キャシイは、お茶を入れ替えて出すと、やっと涙を拭ったとある。満感の思いをこめた涙であろう。

## 2. キャサリンの涙

では次に、この小説の中の女主人公キャサリンの涙をあたることにしよう。気の強い傲慢なキャサリンのことである。その勝気な女性の流す涙も、なかなか効果的である。

少女時代のキャサリンが、ヒースクリフ少年と共に駈け出して、スラッシュクロス屋敷に行ってみたことは先程も述べた。変化のない嵐ヶ丘の世界に住む彼女には、新しい世界の探検だったのである。そこで、ヒースクリフだけは、無頼漢と屋敷の者に罵られ、先述の通り一人帰って来たのである。一方、犬に噛まれたキャサリンは皆に大事にされ、傷の治療も受け、すっかり上流社会の令嬢になり切って嵐ヶ丘に帰って来る。当然、スラッシュクロス家両親の訪門も受けるが、エドガー、リントン、イザベラ兄妹の訪門も受けるわけである。ある日のこと我儘なキャサリンは、大事なお客様エドガーを怒らせてしまう。「僕はもう来ない」と彼に叫ばせてしまう。

‘You made me afraid and ashamed of you’ he continued; ‘I’ll not come here again !

Her eyes began to glisten, and her lids to twinkle. (Chapt. IIX)

「君は恐いし、又君のこと恥しいよ。」と彼は続けた。「もう僕は二度と来ないからね。」

彼女の眼はキラキラと輝き始めた。そして、瞼をしばだいたいた。眼が涙でキラキラと光り、ばちばちとまばたきを始めている処の描写も、実に細くてうまい。更に描写は続く。

‘Well, go, if you please—get away! And now I’ll cry.—I’ll cry myself sick! (ibid)

「いゝわ、行きたければどうぞお帰えりになって。出て行ってよ。私、泣いちゃうから、泣いて泣いて病気になっちゃうから。」

宣言して泣く処が面白い。勝気な女性の泣く場面。泣き方にも傲慢なキャサリンの性格まる出しである。

She dropped down on her knees by a chair, and set to weeping in her serious earnest. (ibid)

椅子の側に、くずおれるように坐りこむと、大まじめによゝとすゝり泣き始めた。構えて息も絶えんばかりに泣く様が想像出来る。我儘な女性の男性を困らせてやろうとの泣き方である。

だが、このような派手な泣き方ばかりではない。涙が一滴二滴ポトリ、ポトリと地に落ちる静かな泣き方も見事に表現されているのである。

この訪門者なるエドガー、リントンから、やがて求婚される。それをキャサリンはネリーに打ち明ける。「ネリー、私求婚されたのよ。あの人は、若くて、綺麗で、お金持ちで、私も大家の奥様になれるからお嫁に行くのよ」と述べる彼女の言葉を聞けば、如何にも得意満面な受け止め方ともとれるが、それは表面上だけのことで、内面は決してそうではない。彼女の本心を有弁に物語る涙の描写を見よう。

‘Where is Heathcliff?’ she said interrupting me.’....

...There followed another long pause, during which I perceived a drop or two trickle from Catherine’s cheek to the flags,... (Chapt. IX)

「ヒースクリフは何処？」と彼女は部屋に入って来ると、私の歌っているのを遮りました。彼女は長い間黙っていましたが、彼女の頬から涙が一粒、二粒、ポタリ、ポタリと床に落ちるのを私は見遁しませんでした。ヒースクリフを忘れ去らねばならぬ辛さは、この一粒、二粒の涙によって表明され、千語の心理描写にも勝る見事さである。又幼い時から、彼女を育てよく知り尽くしている、ネリーにもすぐに彼女の本心を見抜く力はあったのである。

このあたり、彼女のこの涙を見落しては、彼女の本当の気持を理解することは困難であると思う。若さに魅かれ、容貌に惹かれ、富に憧れた浅薄な女のように誤解され勝ちであるが、彼女の悲しみ、辛さはこの涙の中にこそあるのである。

### 3. 娘 Cathy の涙

母に比べ、遥かに心優しい女性に描かれている、娘のキャシーには涙の場面もずっと数多いようである。何と言ってもこの少女の悲しみは、父の



病気を思う時又父の死を考えこむ時である。

生涯に於いて多くの人の死を経験した、エミリーの死に対する悲しみは非常に realistic に表明されている。そして、その悲しみを気づかれまいとする心遣いは更に人の胸を打つ。父の病気は一向にはかばかしくない。母を失っているキャンシイには父だけが唯一の肉親、頼りである。死を考えずにはいられない。ネリーと一緒に散歩している時のことである。

She went sadly on.

'No,' she repeated, and continued sauntering on, pausing at intervals, to muse over a bit of moss, or a tuft of blanched grass, or a fungus spreading its bright oranges among the heaps of brown foliage; and, ever and anon, her hands was lifted to her averted face. (Chapt. XXII)

彼女は悲しそうに歩き続けた。

「いゝえ。」彼女は繰り返すと、なおも、そゞろ歩きを続けた。時々立ち止まると、一群の苔の処で思いに耽り、又一ふさの青ざめた草の側で考えこみ、茶色の葉の中に輝く、みかんの色に見入っていたりしたが、時折、顔をそむけてそっと手をああいた。

まるで、日本の能の仕ぐさである。能では泣く場合は、そっと手を眼のあたりにかざすだけである。じっと苔に見入るような振りをしたら、悟られぬように、顔をそむけてそっと手をあてる。この描写のうまさ、優雅さ、何と余韻を残す描き方であろうかと驚くのである。その悲しみの深さが効果的に表現されているのである。

だが、素早く見附けたネリーが「まあお嬢さま、何故泣いていらっしゃるのですか」と彼女の肩に手をおいて尋ね、「お父さまがお風邪をお召しになったと言って、お泣きになってはいけませんよ。」と慰さめる。

She now put no further restraint on her tears; her breath was stifled by sobs. (ibid)

抑えに抑えた、キャンシイもネリーのやさしい慰めの言葉をきくと、父の病状を案ずる心配は、どっと涙となって、息も詰りそうであった。微妙な心理の推移を誠に細く捉えている。

ネリーが、自分の仕事に夢中になっていると見るや、自分には気がつか

ぬものと思ひこみ、声を忍んで泣き始めている。

As soon as she supposed me absorbed in my occupation she recommenced her silent weeping; it appeared, at present, her favorite diversion. (Chapt. XXII)

silent weeping (ネリーを心配させまいとする心遣いの程が偲ばれる。)  
her favorite diversion (泣いておれば気も晴れるだろう。)と

ネリーもそっとしておく、お互を思いやる心暖まる描写の程である。

I could not bear to witness her sorrow, to see her pale, dejected countenance and heavy eyes... (ibid.)

彼女の悲しみ、青ざめた打ちひしがれた顔、そしてあつぼったい眼を、見るに忍びませんでした。

とネリーは言っているが、こゝでは泣きはらした眼を具体的に表わしている。

見えないようにしのび泣き、声を落してのかくれ泣き、慰さめられると却ってワッと泣き出し、そして遂には眼を真赤に泣き晴らす迄の段回が細く描かれている。

だが、このキャシイもネリーに隠れて、秘密の文通をリントンとする処がある。もともと、嵐ヶ丘に行くことは、父上エドガーの禁ずるところであり、増してや少年リントンを訪問すること等は許される筈がない。彼女は、秘かに彼と文通を始めるのであるが、その手紙の束はネリーの見附けるところとなり、命じられるまゝに暖爐にくべてしまわねばならぬ破目になる。メラメラと燃え上る焰を見つめつゝ、一枚だけとっておいてもいゝでしょうと、ネリーに懇願するが、ネリーは許してくれない。すっかり腹を立てたキャシイは、二階に上ったまゝ、食事にも下りて来なかった。夕方になって、お茶の時間やと下りて来る。

She wouldn't dine; but she reappeared at tea, pale and red about the eyes and marvellously subdued in outward aspect. (Chapt. XXI)

外見上は、驚く程落着きを取り戻した様子をしていたが、青い顔をして眼を真赤に泣きはらしていた。

---

泣くということも、いろいろ具体的な描写があるものである。

さて、いよいよヒースクリフの涙と、筆をすすめてゆきたい。

#### 4. ヒースクリフの涙

元来、泣くことの嫌いなエミリーである。女々しさが嫌い、男のような勇気をもった彼女のことであるから、意気地なしの少年の涙を描くのは、うなずけても、ヒースクリフのように、自分の理想とする強い主人公に泣かせるとは、余程のことであろう。少年ヒースクリフを描くにあたって、

He complained so seldom, indeed, of such as these— (Chapt. IV)

(ヒースクリフはこのようなことに対しても滅多に不平は言いませんでした。)

と少年時代のヒースクリフのことを述べて居り、辛抱強い少年が、悩みに耐え乍ら、強い人間に成長した後、見せる涙は何の意味であろうか。鬼の眼にも涙という言葉通り、両面兼ね備えた人間を観察していて、それを realistic に表現出来るエミリーの技量を示すものであろう。

He got on to the bed, and wrenched open the lattice, bursting, as he pulled at it, into an incontrollable passion of tears.

‘Come in! come in!’ he sobbed. ‘Cathy, do come! Oh! my heart’s darling! hear me this time, Catherine, at last. (Chapt. III)

彼はベッドの上にとび乗ると、窓格子のところににじり寄った。それを引っ張ると、ワッと泣き出して抑えるこのとの出来ぬ激情の涙にくれた。

「入っておいで。」彼は啜り泣いた。「キャシイ、入って来てお呉れ。私の大事なキャサリン。お願いだから今度はどうか私のいうことをきいてお呉れ。」

物語の極く最初の方の出来事で、始めて読む人々には、丁度小説の中の Lockwood と同じように、訳の分らぬ事件に遭遇しているわけであるが、物語の筋を追えば、この瞬間こそ、ヒースクリフが十八年間待ちに待った時である。キャサリンの死後十八年間、彼女の霊を追い求めて、その孤独に耐えて来たヒースクリフに、その憧れのキャサリンが、亡霊となり、娘時

代の部屋に姿を現したのであるから、ヒースクリフが気も狂わんばかりに、もう一度出て来て呉れと、懇願するのも無理はない。切なる思い、願いは、涙となり、彼はすゝり泣く。抑え切れない激情の涙を流す、ヒースクリフである。涙の潤れていない人間を表明して、親しみの持てるところである。

The spectre showed a spectore's ordinary caprice: it gave no sign of being; but the snow and wind whirled wildly through even reaching my station, and blowing out the light. (ibid)

ロックウッドは見たというおぼけであるのに、おぼけはおぼけの気まぐれでなかなか、ヒースクリフの要求通りには姿を見せて呉れない。

生体を現わさず、雪と風が吹き荒れるばかり、風は吹きこんで、ろうそくの火も消してしまふ。なかなかユーモラスなところでもある。

では、いよいよヒースクリフとキャサリンの激しい、愛の場面に入ることにして。キャサリンの臨終での二人の愛の告白であるが、これは余りにも生々しく、甘さの一片も見出すことの出来ぬ愛の場面であり、激しい、きびしい愛の告白には逆り出る涙こそふさわしい。

ネリーの合図によって、ヒースクリフがやっと病室に入ることを許されたのは、エドガーが教会へ出席している日曜日の午前中のことで、彼女は既に病重く、意識も朦朧としていて、始めのうちは、ヒースクリフを認識するのも、困難位の状態であったのである。待ち構えていたヒースクリフは、許されるや否や、もどかしとばかり大股に病室にとびこんで来る。

'And now he stared at her so earnestly that I thought the very intensity of his gaze would bring tears into his eyes; but they burned with anguish: they did not melt. (Chapt. XV)

今や彼は余りも熱心に彼女を見つめたので、そのまなざしの激しさの為、彼の眼に涙が浮ぶだろうと思いましたが、苦悩に燃えて遂にその眼はうるみませんでした。

描写の仕方でも激しいが、息詰る愛の場面としては、ふさわしいところである。ネリーの計いで、エドガーの留守中やっと入りこむことの出来たヒースクリフである。このキャサリンと向い合った時、長年思い続けた人、

而も自分とは結婚して呉れなかった人だが、今は病気でやつれてしまった姿を見て感極まっている。この大事な人は既に死にかかっている。束の間の貴重な生命である。苦悩に満ちた彼の眼からは、はふり落ちる筈の涙も苦しみの火に燃え切って涙となっては溶けて来ない。

だがその次にヒースクリフの発した真実の言葉、いゝ加減の愛の言葉としてきゝ流すことの出来るものではないのである。激しく相手の不実をなじる言葉である。エミリーは誠の人であったから、いゝ加減なことでお茶をにごすようなことは決して出来なかった。とことん迄自分の真実、自分の信念を述べねば気がすまなかった。その言葉にはうそがない。それだけに相手の心に訴える力があるのである。

“I love my murderer but yours! How can I! They were silent— their faces hid against each other and washed by each other’s tears. (ibid)

これは、一番人々の心にひびく、愛の言葉として記憶されるものである。

「僕を殺してしまった、殺害者のきみを愛する、でも、君自身を殺してしまった、その君はどうして愛することが出来ようか？」

勿論精神的に殺したわけではあるが、自分というものを殺し、本当の自分の心をいつわって、エドガーと結婚し、自分の真の愛を全うしなかった、キャサリンをヒースクリフはたとえそれが、死の床に伏すキャサリンであるにしろ許すことは出来ない。こゝにエミリーの若さを感じる。若い故の妥協を許さぬ厳しさがある。お互に抱きしめて、相手の胸に顔をかくした二人は泣き濡れて、あとは言葉も続かず泣き続けている。劇的シーンであるし、ヒースクリフの男泣きである。

“In her eagerness she rose and supported herself on the arm of the chair. At that earnest appeal he turned to her, looking absolutely desperate. His eyes, wide and wet, at last flashed fiercely on her: his breast heaved convulsively. (ibid)

同じく続く場面であるが、起き上がったキャサリンは椅子の腕で体を支える。その熱心な訴えに、もうどうにでもなれと絶望的に、彼女を見る。彼の眼は大きく見開かれ涙にぬれていた。激しく火のような眼でみつめ、胸は大きく痙攣しているように波打っていた。男の動哭ともいうべきものが

感じられる。

as it seemed Heathcliff could weep on a great occasion like this.

(ibid)

「このような重大な場合には、ヒースクリフだって泣けるようです」とネリーの言葉として驚きを表明しているが、まさに鬼の眼にも涙にあたる処であろうか。

“She is dead! I’ve not waited for you to learn that. Put your handkerchief away—don’t snivel before me. Damn you all! She wants none of your tears!” (Chapt. XVI)

「死んだよ。そんなことをきく為に、お前をこゝに待っていたわけじゃないよ。ハンカチなんかおしまい。そこで私の前で鼻をすゝらないで呉れ。くたばっちまえ。彼女はお前の涙なんか一寸も望んでやしないんだぞ」。

こゝで本来のヒースクリフ、即ちエミリー、ブロンテに立ち戻る。彼女は涙を見せること等は、大嫌いな人間である。雄々しく耐える人間である。そのヒースクリフに涙を浮かべさせたのであるから、前述の場に於いては、彼が如何に深い悲しみを覚えたかは察することが出来る。

“How did—?” He endeavoured to pronounce the name, but could not manage it, and, compressing his mouth he held a silent combat with his inward agony. he trembled, in spite of himself, to his very fingers’ end.

(ibid)

「キャサリンの最後はどのようなようだった？」とネリーにきゝたい処であるが、余りの悲しみに、彼女の名前を呼ぶことすら出来ない。心の中の苦しみと闘いつゝ、声も出さずにそれに耐えるが、口は痙攣し、我にもあらず指の先迄わなわなとふるえてふるえが止まらない。心の中は一杯の涙。やっとそれに耐える。人の死の悲しみに逢った人のみ経験することの出来る激しい感情を実にうまく表現している。

だが私の心を最も打つ場面は、ヒースクリフがこの男の涙を見せまいとする処である。

“I shall have that home. Not because I need it, but—” He turned abruptly to the fire, and continued, with what, for lack of a better word,

I must call a smile—'T' ll tell you what I did yesterday.' (Chapt. XXIX)

キャサリンの死後、キャシイが成長してからの話である。復讐の手段の一つとしてリントンと無理矢理に結婚させられたキャシイは父エドガーの臨終の報を受け里に帰っている。父の死後もなお、里に居続けるキャシイをヒースクリフは残酷にも連れ戻しに来る。ふと眼をとめてキャサリンの肖像を見る。勿論エドガーのと二つが並んでいるのであるが、彼が眼をとめたのはキャサリンの方だけである。

「あれは、貰って行くよ。要るからじゃないけど、」と言って彼はクリと爐の方をむき、ネリーには背中しか見せない。「なつかしい大事な人の肖像だからね」と言いたいのだろうが言葉にはならない。その大きな背は何を物語っているのであろうか。とめどもなく流れ落ちそうな悲しみの涙は彼は人には見せたくない。やっと耐えている様子がよく分る。やがてくると向き直り、やっと苦しみの笑みを浮べると「昨日はね」と如何にも何気ない様子でネリーに話しかけている。だがそれは彼には出来るありったけの努力だったのである。ネリーはこのヒースクリフの悲しみを見抜いている。既にキャサリン逝って何年であろう？ 十八年の歳月が流れているにも拘らず、この瑞々しい悲しみ、この深い感情、エミリーの描くヒースクリフは誠に不思議な存在である。二重性をかくもはっきり現した人物を、姉シャーロットも理解出来なかったことを、もう何度か書いて来た。エミリーが心の底にいつも疑問を持って対して来た罪の問題、それに涙を流して考えて来た、そして自由になりたい、その罪から解き放たれたいと彼女はひたすらに祈った。

彼女の詩を引用してこの小論を終りたい。

What tenants haunt each mortal cell,  
What gloomy guests we hold within  
Torments and madness, tears and sin.—

(To Imagination, 11 18-20)

(下線筆者)

誰の体の内にも付き纏い

私たちが招き入れる憂鬱な客人たち

苦悩と狂気、涙（悲しみ）と罪！